

次の文章は『朝日新聞』朝刊「私の視点」のために一月三十一日に速達で送ったが採用されなかったものである。  
因みに『朝日新聞』の二月六日号の「声」欄には「藤原論文読み疑問が解けた」という文章がのせられた。

一月六日この欄（編集部注・『朝日新聞』「私の視点」欄のこと）に藤原帰一氏が書いた「理想主義」を超えよう」を読んだ時、私自身を含む彼よりも一つ前の世代の改憲反対論を「理想主義」の名によって批判したもので、反論するのも大人気ないと思った。

しかしその後二〇年ほど前に私の演習に参加して現在では国際貿易に従事しながら多文化共生を考えている人から、これを読んで平和への理想を論ずることは無益なのだろうか疑問を持ったので返事を欲しいという葉書を貰った。それには私信で答えたのだが、一月三十一日の「声」欄にも似たような疑問が出されているのを見て、やはり反論を公にすることが必要であると考えるに至った。

藤原氏は「イスラム急進勢力や福音派キリスト教徒の抱く終末論的世界観」の「理念の戦い」が世界の現実とみて、それ故に「理想主義」は克服されるべきであると述べているが、実はこのように「現実」をとらえること自体が、「文明の衝

突」論と同じように極めて危険な見方といわなければならない。

まして「他者の排除なしに平和があり得ない」と信じ込む勢力を前に、戦力を放棄した世界を説いても意味はない」と言っているのは、あらかじめ平和の敵を想定してそれに武力を以て対抗すべきであると主張することによって暴力のエスカレーションを招く結果になることを恐れる。実は「他者の排除なしに平和があり得ない」と信じ込む勢力」の存在を前提とすること自体が、紛争を解決しようとする

### 軍事力によらぬ現実的対応を

——藤原帰一氏の論への批判——

石田 雄

る現場にとつて此の上なく迷惑な考え方となるのではないか。

例えばパレスチナで子どもたちの栄養改善や難民キャンプの子ども文化センターで支援している日本ボランティアセンターの活動家たちの視点からみてみよう。彼らにとつて重要なのは「他者の排除なしに平和があり得ない」と信じ込む勢力」を特定することではなく、必要に応じてイスラエルの医師団とも協力して、困っている人たちの健康と文化を改善し、信頼醸成と暴力の排除を実現することである。紛争に苦しめられている現場の視点

からみれば、力によって敵に対抗しようという考え方が現実的解決を困難にする。「他者の排除なしに平和があり得ない」と信じ込む勢力を前に、戦力を放棄した世界を説いても意味はない」という論者は、軍隊によって対抗せよというのだろうが、軍隊は果して国民を守つただろうか。

一年半軍隊で生活した体験からみて、また沖縄や旧満州の事例からみて、軍隊は国民を犠牲にしたと言わざるをえない。軍国主義が悪かったので民主社会の

軍隊は違うという人がいるかもしれない。ヴェトナム戦争のとき帰休兵と論争したことがある。私がヴェトナム市民を何故殺すのかと問いただすと、いつ誰から殺されるか分からないからだと答えた。結局外国に軍隊がいる限り、このようなことは不可避だ。精神障害を起した米兵も多い。事態はイラクの場合も同じだろう。

軍事紛争の現場で苦しんでいる市民、軍人にとつて現実的な解決は外国から軍隊をひきあげることである。そして将来に向つて軍事紛争を防ぐためには軍事力の強化によって緊張激化を招くのではなく、信頼醸成によって軍事力を相互に削減することにあるだろう。

（いしだ・たけし、政治学研究者、本会会員）